



Michigan Newsletter

April 2025

No.7

ミシガン州経済交流駐在員

経済交流

1. トランプ政権の関税措置の影響について

ページ 1~2

教育交流

1. 州内で日本語を学ぶ高校生に滋賀をアピール！

ページ 3~4

ミシガントピック

1. 多文化センターを再調査！

ページ 4~7

経済交流

1. トランプ政権の関税措置の影響について

4月29日、トランプ大統領が2期目就任100日目にあわせてミシガン州で演説を行ったことは日本のメディアでも取りあげられました。自動車メーカー等は、関税が深刻な経済的打撃を与えると主張していますが、トランプ大統領は、税制と関税措置の進化によって、「自動車メーカーはミシガン州に戻ってきて、再び自動車を生産するようになった。」「中国を第一にするのではなく私はミシガン州を第一に、米国を第一にしている。」と述べ、関税措置はミシガン州にとって経済的な命綱だと説明しています。

ミシガン州内には、自動車産業をはじめ、449社の日系企業が進出しています。今回、これらのミシガン州に拠点を置く日系企業にヒアリングを行ったところ、様々な声が聞かれました。

【自動車産業関連】

「米国外工場から輸入販売している完成品に対する関税による利益率低下、米国外から輸入している材料、部品に対する関税による購入価格上昇といった影響が考えられる。インフレ、景気後退懸念により需要そのものが落ちてしまう懸念もある。完成品の生産国や調達先の変更を検討している。」(自動車部品関連メーカー)

「日本やメキシコ、中国からスチール等の部品を調達しており、今回のアメリカの関税措置に対しては、輸入価格の高騰が予想されることから、最終関税が何パーセントになるかは不明だが、それを踏まえてケースバイケースで予想をたてて対策を検討している段階。どのように輸入価格の高騰を押さえるかについて大変苦慮している。」(日系自動車部品メーカー)

「関税措置に対して、何も対策をしない場合、数百億円レベルの関税負担が発生しビジネス継続が極めて困難な状況となる。顧客への売価として転嫁、最終仕向けがカナダ・メキシコの場合は商流の変更、最後の手段として生産地移管など、複数の施策を合わせて検討中。」(車載機器の製造・営業)

【その他産業等】

「北米における現地調達・生産の比率が高いため、北米ビジネス全体で考えれば金額的な影響度は極めて限定的だが、先行きに不透明感もあるため、顧客に対して関税による将来価格の見直しの可能性について事前に理解を求める努力をしている。」(物流関連メーカー)

「米国拠点における調達コスト上昇の影響については、関税影響前の備蓄在庫の活用や製品への価格転嫁、調達先の変更等を行い、影響の抑制に努めることにより、軽微と想定。世界経済の停滞やサプライヤーが関税分を価格転嫁すること等による各事業の需要減少のリスクについて、今後注視する必要。」(総合化学メーカー)

「関税の方針が変わるたびに計算の見直しで大変。会社の輸入品の規模にもよるが、そのまま24%の関税となるとかなりの影響が出る。企業が海外に製造を委託した場合、輸入時に関税が発生するため、それを製造したメーカー側がどれくらいカバーしてくれるかの交渉が企業にとって重要になっている。」(商工会関係者)

北米での拠点の有無等によっては、関税の影響が意外に少ないと答えた企業もある一方で、自動車関連産業は大きな影響を受けていることがわかります。関税の影響を価格転嫁することに慎重な企業も多く、経済全体の先行きの不安の声も多数聞かれました。

このような状況下で、州政府は企業に対しどのようなサポートを行っているのでしょうか。ミシガン州経済開発公社担当者にもインタビューを行ったところ、日本企業に関わらず、ミシガン州の多くの企業が関税を回避するため、可能な限りサプライチェーンの現地化に取り組んでおり、経済開発公社では、「サプライチェーン・レジリエンス・チーム」がサプライヤー探しを支援しているとのことでした。

さらに、経済開発公社では、企業向けにウェブサイトに関税リソースページを開設し、関税への疑問を Q&A 形式で解説するなど、企業のサポートを行っています。

(<https://www.michiganbusiness.org/about-medc/tariffs/>)

企業への影響を中心に見てきましたが、大学等の教育関係者からも、この景気後退の影響を危惧する声が聞かれます。過去、景気が後退し、世帯収入が不安定になることで、日本への留学をはじめ、将来につながるプログラムへの参加をあきらめる学生が見られたとのことで、今後の景気の動向によっては、学生時代の経験や就職時の選択肢が狭まるなど、影響が若い世代に広がることが懸念されます。

教育交流

1. 日本語を学ぶ大校生に姉妹県州をアピール！

ランシング市内のランシング・コミュニティ・カレッジ(LCC)では、複数の日本語のクラスが開講されています。様々な年齢の学生が集まり、仕事をしながら通う学生もあり、日中だけでなく、夜間の日本語クラスも設けられています。

今回、日本語の中級のクラスの授業に参加し、滋賀県について紹介する機会を得ました。参加した学生からは、将来日本語の先生になりたい、近いうちに日本に行く予定、留学に興味があるといった声が聞かれ、皆さん積極的に授業に参加していました。



私からは、滋賀県とミシガン州の姉妹県州と、そのプログラムとして、日本語を学べる留学先であるミシガン州立大学連合日本センター、ミシガン州民であればだれでも参加できる友好親善使節団を紹介しました。特に、使節団については、知らなかった、行ってみたい、という声を頂きました。使節団は 18 歳以上のミシガン州民であればだれでも参加でき、もちろん学生も歓迎。今年 7 月に滋賀県を訪問予定のミシガンのメンバーの 31 人の中にも、学生が 7 人含まれています。実は、使節団の定員は、姉妹都市関係者の口コミ等だけで埋まってしまうほど人気で、その分一般には知られておらず、興味を持ってくれる人はまだまだいる可能性を感じました。

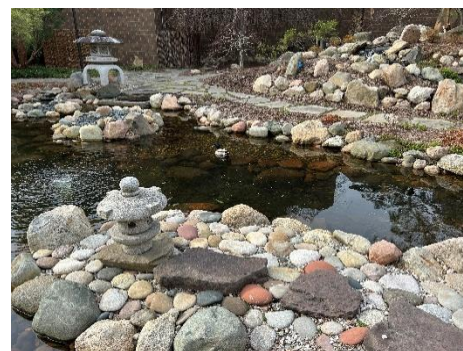
LCC の授業はとてもフレキシブルで、対面で参加、授業のリアルタイムにオンラインでの参加、後日映像を視聴など、複数の受講の選択肢が用意されています。オンラインでの受講も主流のため、日本語ネイティブと会って話せる場は貴重ということで、後半は会話練習を一緒に行いました。レストランでの注文、行きたい場所、日本語でじゃんけんなど、テーマを決めて話しました。英語でじゃんけんは「Rock-Paper-Scissors」と、ぐーちょきぱーそのままなのですが、日本語のじゃんけんの語源っていったい何？と盛り上がりました。

【コミュニティ・カレッジとは】

公立の2年制大学のことで、もともとは地域住民のためにつくられ、「望めばだれでも学べる」というポリシーを掲げています。そのため学費が安く、入学難度も低いのが特徴で、コミュニティ・カレッジの卒業後は、4年制大学に編入することもできます。

アメリカ国内には1000校を超えるコミュニティ・カレッジがあり、ミシガン州だけでも33校あり、地域の学びを支えているそうです。

余談ですが、この LCC は琵琶湖汽船(株)の遊覧船「ミシガン」と大きなつながりがあります。LCC は、琵琶湖汽船(株)とのつながりができたことをきっかけに、「ジャパン・アドベンチャー・プログラム」という、琵琶湖汽船(株)の琵琶湖汽船の遊覧船「ミシガン」を教育の場として、留学生は乗客サービスを実践し、併せて日本語や日本文化等の、来日教授の専門授業を受けるプログラムを実施していました。



同プログラムは、1982 年から 30 年以上にわたって続けられ、のべ約 600 名もの LCC の学生が参加しました。民間企業と大学による交流プログラムは国内初で、社会的な評価も高く、留学生は毎日真剣に研修に取り組み、サービスする姿がフレッシュで、乗客にも大変好評だったそうです。



私もこちらに来てから、同僚や、教会で知り合った人、子供の学校の保護者など、このプログラムの参加者と出会う機会が多々あり、このプログラムがどれだけ愛されていたかを実感しています。LCC 卒業後 4 年制大学にも行ったけど、このプログラムが一番良かった、という感想を伝えてくれた方もいます。日本語能力の要件も厳しすぎず、学び、働きながら日本に滞在できるということで、幅広い層の参加者を獲得し、今のミシガンと滋賀の絆を草の根で広げていくうえで大きな役割を果たしたと言えます。



今となっては過去のプログラムですが、このことを変わらず思い出させてくれるのが、LCC のキャンパス内にある「重松記念庭園」という日本庭園です。2006 年にプログラムの 25 周年を記念して造られ、名称はプログラムを立案した琵琶湖汽船株式会社社長、重松徳氏に由来します。枯山水庭園、月見台、雪見灯籠など、様々な要素が詰め込まれた池泉回遊式庭園で、ミシガン州と滋賀県の人々の強い結びつきを感じさせる場所がキャンパス内にあることが一滋賀県民としてうれしく感じました。

ミシガントピック

1 ミシガン州立大学多文化センターを再調査！

2 月のニューズレターにて、トランプ政権の多様性・公平性・包括性(DEI(Diversity, Equity, Inclusion))プログラムに対する連邦政府の取り締まりの真ただ中に開館した、ミシガン州立大学多文化センターの紹介をさせていただきました。反響を頂き、以下 3 点に焦点を置いて、再度リサーチしました。

(1) センターの役割、目的

人種的および民族的マイノリティの学生のさらされる偏見や不平等の改善し、キャンパスの環境や大学の組織文化の変革を行い、あらゆる背景を持つ学生が成長し、成功できる、居心地の良いキャンパスコミュニティを築くという目的で建設。

(2) 設置の経緯

多文化センターは、以下の年表からわかるとおり、半世紀以上にわたる学生からの要望が形になったものでした。トランプ政権下での開館でしたが、歴史を振り返れば、大学側がこの流れを止める理由はなかったことが見て取れます。

1960 年代	公民権運動の中、黒人学生が大学キャンパスにおける人種的および民族的マイノリティの権利の向上を要求。
1989 年	黒人学生リーダーが平和的抗議デモ「スタディー・イン」を実施。 その後大学側が、組織的多様性：卓越性の実践 (IDEA (MSU Institutional Diversity: Excellence in Action)) の初版を作成。
1992 年	<u>IDEA の改訂版において、教育、研究、アウトリーチ、キャンパス環境等に関する 50 の行動計画を提案。その中に、「リソースが許す限り、キャンパスにおける多様性と卓越性に特化した多文化センターである『新しいコミュニティのためのセンター』の設立に向けた取り組みを開始する」という提言が盛り込まれる。</u>
1997 年	大学側が多文化センターのためのスペースをして現在ある建物のうちの一角を提示。 学生側は満足しなかったが、将来的に独立した建物を建設するための第一歩として提案を受け入れ。
1999 年	<u>キャンパス初の多文化センターがユニオンという建物の地下に開設。ミーティングスペース、リソースルーム、学生集会スペース、理事長室などが設けられた。</u> <u>学生側はスペース不足とセンターが独立していないことへの懸念から、集会やデモ行進を実施。</u>
2013 年	大学側が地下からの移転に同意、同建物の 2 階に移転。
2018 年	キャンパス内に独立した建物を建設するためのオンライン署名活動が開始され、 <u>学生が「多文化センター建設を目指す学生たち」という組織を結成。</u>
2019 年	大学側が多文化センターの実現可能性調査を開始。
2020 年	新型コロナウイルス感染症拡大によるアジア人への憎悪の激化と、ジョージ・フロイド氏の殺害事件による人種間の緊張の高まりから、キャンパスにおける人種差別事件や安全上の懸念への対応を求める声が強くなる。 <u>その結果、大学側は DEI (DeFi: Debate Independent Eligibility: 社会的平等) の取り組みと並行して、人種的平等に関するタスクフォースを招集。</u>
2023 年	大学理事会は全会一致で建設開始を承認。その後、多文化センターの起工式。
2025 年	多文化センター開館。

(3) 現地視察

このように設立の経緯を紐解くと、この建物はマイノリティのバックグラウンドを持つ学生の強い意志が受け継がれ、建設につながったことがわかります。こういった背景を知ると、特定の宗教等のバックグラウンドがないと施設を利用できないのではと思えますが、現地調査したところ、驚いたことに、そういったことに関係なく、誰でもフリースペースを使え、学生であれば会議室の予約や利用ができ、費用も無料だそうです。いくつか視察した部屋を紹介します。

① 瞑想の部屋

ラマダンの時期にムスリムの方が利用されることも多いそうですが、宗教に関わらず誰にでも開かれており、休憩やリラックスに使えるスペースです。夜11時まで開館しているので、夜に瞑想に訪れる学生も多いそうです。部屋はグループ用の部屋と、個人用の部屋があり、空いていればその場で利用することも可能です。



瞑想の部屋の物品



瞑想の部屋（個人用）



瞑想の部屋（グループ用）

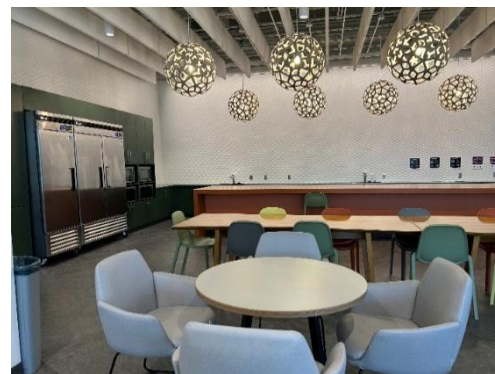


瞑想前に体を清めるスペース

② 共用キッチン



授業の終わった17時頃から、20時の間にイベントもよく開かるそうで、明るくおしゃれなキッチンは、大きな冷蔵庫など設備も整い、これまでにすでに、ピザやカレータコス、タイ料理などのイベントが開かれているそうです。アジアからの学生にも広く利用されています。



③ 事務所

複数の団体の事務所機能もあります。

1982 年にビンセント・チン氏がデトロイトで反アジア系ヘイトクライムの被害者となったことを契機に発足した、アジア太平洋系アメリカ人学生組織(APASO(Asian Pacific American Student Organaization))をはじめ、学生コミュニティの政治的発言力を高めるための組織が複数入居しています。

④ 会議室

大小ある複数の会議室はガラス張りで開放的。ワークスペースとして開放されている部屋もありました。



⑤ セレモニーのためのサイト

誰にでも開かれた施設なのですが、建物の外に一か所だけ特定の団体に限られたスペースがあります。セレモニーや儀式を行う場所で、使用はミシガン州立大学の北米先住民学生組織（NAISO）や、大学周辺のオケモスやグレーターランシング（州都を中心とした都市圏）の団体などの 5 団体に限定されているそうです。



建設中の開放スペース



セレモニーのためのスペース

前はできたところだったのですが、開館から 2 か月たち、外装も整ってきました。木が植えられ、これから芝生が敷かれる予定の場所もあります。

ビアガーデンのような外の開放的なスペースは事前に予約すればイベントに使用できそうで、これからどんどん学生達に利用されていく、活気のある多文化センターを今後も見ていこうと思います。